

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

会話場面における人の概念の類型論 (I) : 人称代名詞の etic な成分の再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 集而 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004473

会話場面における人の概念の類型論 (I)

——人称代名詞の etic な成分の再考——

吉 田 集 而*

Typology and Person Category in Deixis (I)
Rethinking of Etic Components of Personal Pronouns

Shuji YOSHIDA

Person cognition in deixis is the main topic of a series of three papers: (1) the etic semantic components of person deictics; (2) the typology of person cognition in deixis and correlation among language groups and the types; and (3) evolution of the types.

This paper establishes the universal semantic components of personal deictics, the conceptual basis for the following two papers in the series. Seven emic studies (Austerlitz 1959; Berlin 1963; Brichoux 1977; Conklin 1962; Krup & Altmann 1961 and McKaughan 1959) and three etic studies (Buchler & Freeze 1966; Forchheimer 1951 and Ingram 1978) on personal deictics are evaluated here. But it is apparent that componential analysis of personal deictics is rather arbitrary or intuitive in the emic studies. However, a combination of emic and etic studies is more powerful than either types of study individually.

Through discussion of those studies, I formulate a new universally applicable person deictic system. This system consists of four person categories, "Dialoguent person (D-person)", "Loquent person (L-person)", "Audient person (Au-person)" and "Absent person (Ab-person)" to replace the usual Western system such as 1st person inclusive, 1st person exclusive, 2nd person and 3rd person, respectively. The most important difference between the new and old systems is that 1st person inclusive is treated as an independent person category. In addition, the logical basis for the system is exemplified for D-person as an independent person. For enumeration, singularity, duality, "trinality" and plurality are adopted instead of other number systems,

* 国立民族学博物館第2研究部

because others are unable to deal with the single form of D-person, such as Maranao, Hanunóo and Lakota, for example.

Lastly, Ab-person is unsuitable as a universal person category; Ab-person is an essential person category in deixis, because it is quite different from the other categories, and demonstratives are actually used instead of Ab-person in many instances. Therefore, Ab-person is omitted from the following discussion.

- | | |
|----------------------------|--|
| 0. はじめに | 3.3. Ingram の研究 |
| 1. 人称代名詞の etic な意味成分 | 3.4. 谷の研究 |
| 2. 人称代名詞の emic な研究 | 4. etic な意味成分の検討 |
| 2.1. Ilocano 語の場合 | 4.1. どの意味成分をとりあげるか |
| 2.2. Maranao 語の場合 | 4.2. 人稱について |
| 2.3. Gilyak 語の場合 | 4.2.1. 人稱のシステム |
| 2.4. Hanunóo 語の場合 | 4.2.2. 他称 (absent person pronoun) について |
| 2.5. Tzeltal 語の場合 | 4.3. 数について |
| 2.6. Indonesia 語の場合 | 4.3.1. 数のシステム |
| 2.7. Subanon 語と Samoa 語の場合 | 4.3.2. 自称の複数について |
| 3. 人称代名詞の etic な研究 | 5. おわりに |
| 3.1. Buchler と Freeze の研究 | |
| 3.2. Forchheimer の研究 | |

0. はじめに

本論は3つの部分からなりたっている。すなわち、(1) 人称代名詞の etic な意味成分を検討すること、(2) その意味成分にしたがって約1000の言語(および方言)を会話場面における人の概念の類型として分析し、その類型と言語グループとの相関性を問うこと、そして(3) その類型の発展の図式の仮説を提示し、その根拠と理由を明示することからなりたっている。本稿はその第1の部分のようになったものである。

さて、本論は指示代名詞の空間成分に関する研究 [吉田 1980, 1981] に続くものであり、ともに deictics をとりあげ、類型論という方法論を用い、言語普遍性の問題と密接に関連しながら、それらの言葉によって標識されている概念の認識の問題に焦点が合わされている。

一般的意味素性をもたず、会話場面の状況によって、はじめてその語の意味が同定できる一群の語がある。より正確に言えば、話されていたり、あるいは指示されている人や物事、過程、活動の同定やその位置が、状況あるいは文脈によってでしか意味

が明らかにならないような語群がある [LYONS 1977: 637]。このような語を意味論の中では他と区別して deictic と称している。deictic は意味論の中ではいろいろと興味深い問題をはらんだ語群である。deictic の代表的なものは、代名詞や場所・時の副詞、また「くる」や「ゆく」といった動詞がある。そして、本論ではその中の人称代名詞をあつかおうとしている。

会話場面においての人の概念は、もとより人称代名詞のみにみられるものではない。実際の会話場面では固有名や親族名、職業名なども用いられ、それらはそれらなりの人の概念の反映であることにまちがいはない。しかし、それらの内のどれがつかわれるかという問題は、後に述べるように本論の範囲外にある。同様に、人称代名詞にさまざまな形がある時、そのどれが用いられるかも範囲外にある。

ここでとりあげようとしているのは、会話場面における deictic な人の概念である。たしかに、親族呼称というものは固有名や職業名と異なり deictic な要素を持っている。しかし、それは同時にそれぞれの文化における親族名称の体系と関連したものであり、純粋な会話場面における人の概念を示すものではない。それに対して、人称代名詞はまさに会話場面においてしか機能しない語群であり、この特殊に発達した deictic な人の概念をあつかおうとしている。

代名詞にかかわる一連の研究は、Berlin と Kay による “Basic Color Terms” [1969] における研究とかなりの似かよった点をもっている。そのため、彼らの研究とこれらの研究がどのように異なるかを述べることによって、より容易に本論の目的を明らかにすることができると思われる。

Berlin と Kay は、基本色彩語彙には限定された語彙の組合せしか存在せず、しかも語彙の組合せを構成している語彙の数と、その語彙の出現順位にはある一定の規則

表1 普遍性にかかわる研究の比較

	指示詞の空間成分 [吉田 1980]	色彩基本語彙 [BERLIN and KAY 1969]	人称代名詞 [吉田 1982]
[関与するレベル]			
動物学的レベル	*		
生理学的レベル	*	*	
認識論的レベル	*	*	*
[相関をもつ現象]			
文化の発展段階		*	(*)
地理的分布			*
言語グループ			*
サンプル数	479	98	約1000

性のあることを見い出した。さらにその規則性は単に共時的な規則にとどまらず、通時的な規則であると主張した。また、その出現の順序は言語グループに相関するものではなく、その文化の発展の段階と相関すると考えた [BERLIN and KAY 1969: 4]。後に Kay と McDaniel は、その規則性に多少の変更を加えるとともに、それが人間の眼の生理学的な機構に準拠したものであるとの説明を加えて合理化した [KAY and McDANIEL 1978: 610-646]。すなわち、人間の生理学的なレベルにおいては人間は普遍的であり、その上に築かれた色彩語彙というものも、その普遍性から逃げられないということになる。

先の指示代名詞の空間成分の研究では、数多くの類型を提示したが、その類型をささえる基礎には3つの空間分割の認識レベルがあるとの仮説を提出した。すなわち、動物から人間にいたるまで共通にみられる動物学的レベル、人間という種に共通な生理学的なレベル、そして各文化ごとに異なる可能性のある文化的（認識論的）レベルがあり、あとの2つのレベルはそれぞれのより下位のレベルの認識を統合しつつ空間分割の認識が行なわれていること、そしてその結果として顕在的・潜在的に空間を距離的に分割するかなり明確な分節点を提示した [吉田 1980: 918-919, 1981: 109-115]。ここにみられた類型は、文化の発展段階と相関するものではなく、言語グループとは弱い相関性を、また環境条件とは部分的に相関するという性質をもつが、全体としては、世界各地でむしろ独立的に発達したとみられる。それは、ひとつは指示代名詞の発生は言語の中でもかなり初原的な語群であると想像され、またそれでいながら、動物学レベル・生理学レベルの空間認識から逃げられないゆえに、その分節点は非常な斉一性をもつものと考えられる。

本論においては、会話場面における人の概念——それは人称代名詞中にみられるものをとりあつかおうとしているのだが——の類型論を展開しようとしている。ここでは、後に述べるように人称と数のみを取りあげているが、話し手と聞き手という認識の発生の上に、どのような人間の存在の様式の認識があるかを問おうとしている。そして、基礎的なその類型としては、わずかの限られた類型しか存在しないことをまずしめし、それらが言語グループとも強い相関性をもつこと、さらにそれらの類型の考えられる進化的発展の図式をも提出しようとしている。

この類型論は、動物学レベルや生理学レベルの認識とほとんど関係していないと考えてよい。これは本能的なレベルでも、知覚的なレベルの現象でもなく、むしろかなり純粋な認識論レベルの現象である。そして、文化の発展段階とは相関せず、言語グループと相関している。この点では前二者の研究とは非常に異なった問題をとりあつ

かおうとしていることは明らかである。その結果、かなり純粋に認識の問題として、どうしてこのような発展の図式になるのか、またなぜ言語グループと相関するのかといった問いに答えなければならないと考えられる。

いまひとつの本論の特色は、サンプル数がこれまでの研究に比べて非常に大きい点である。Berlin と Kay の研究では約100の言語が用いられているにすぎない。Bell によれば、言語普遍性の研究でもっとも多い例は1977年のHyman の444の言語を用いた stress accent system の研究¹⁾である [BELL 1978: 133]。そのサンプル数は先の指示代名詞の研究においてすでに上まわっているが、本論ではその2倍以上の約1000の言語(および方言)をサンプルとしている。実際には、具体的な例にこだわらなければ、その数はさらに大きなものになる。サンプル数の大きさを誇るわけではないが、これまでの研究におけるサンプル数があまりにも少なかったのも事実である。そのため、さまざまな類型がみおとされたり、そのことが時にひずんだ形の結論を導いたりもした。その点では、本論ではそうした危険性をかなりの程度、防げていると思う。

1. 人称代名詞の etic な意味成分

本稿は、先に述べた目的のための前提条件の検討を行なおうとしている。すなわち、deictic な人の概念の人類レベルでの比較を行なうための枠組みをつくりあげることである。実のところ、この枠組みのつくり方によって以下の議論は全く異なった様相を呈する。そのため、やや丁寧な検討しようと考えている。

まずは人称代名詞における emic な研究をとりあげ、それらの示差的特徴を検討し、本当に emic な研究を続ければいずれは etic な示差的特徴が導き出せるのかを検討してみる。ついで、人称代名詞の etic な研究をとりあげ、それらを批判しつつ、また emic な研究での成果をとりいれ、私自身の etic な意味成分——示差的特徴を確立しようとしている。

2. 人称代名詞の emic な研究

2.1. Ilocano 語の場合

Thomas はフィリピンの Ilocano 語の人称代名詞の分析から、図1のような図を提

1) Hyman, Larry 1977 On the Nature of Linguistic stress. In L. Hyman (ed.), *Studies on stress and accent*. Los Angeles, University of Southern California, pp. 37-82.

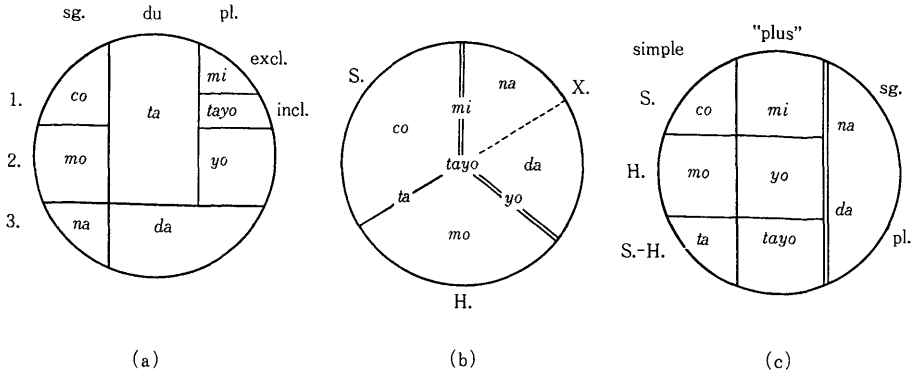


図1 Ilocano 語の人称代名詞 (Thomas [1955: 208] より)

示した [THOMAS 1955: 204-205]。図1の(a)は、これまでの人称代名詞のシェーマを用いたものであり、(b)は考え得られるシェーマを、そして(c)がもっとも適当と彼が思うシェーマである。この中で、彼がもっとも適当と考えるシェーマのみをとりあげることしよう。まず、彼は true pronoun/number pronoun の区別をする。従来は3人称とされていた Ilocano 語の人称代名詞は、単に単複の数をしめず代名詞にすぎないと考えるわけである。真の代名詞は、2組の示差的特徴によって弁別されていると考える。

- (1) 話し手 (S) / 聞き手 (H) / 話し手と聞き手 (S-H)
- (2) simple / “plus”

話し手と聞き手の simple というのは従来は一人称包括的単数(以後は 1st. incl. du. のように省略記号で記す)とされていたものであり、その “plus” は 1st. incl. pl. とされていたものをさす。1st. incl. du. を単数とできないためにつくり出された示差的特徴といってよい。

2.2. Maranao 語の場合

同じくフィリピンの言語である Maranao 語の人称代名詞を McKaughan が分析してみた [McKAUGHAN 1959: 101-102]。彼は、3つの要素のみをとりあげ、それらのプラス・マイナスによって弁別できると考えた。すなわち、

- (1) 話し手を含むかどうか
- (2) 聞き手を含むかどうか
- (3) 複数性をもつかどうか

の3要素である。そして図2のような図式を提示した。なお、Maranao 語は Ilo-

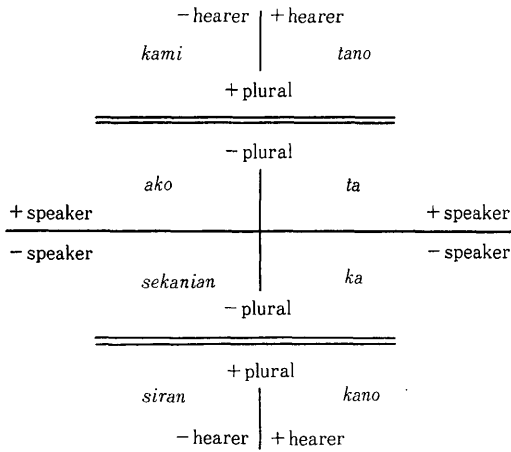


図2 Maranao 語の人称代名詞 ([McKAUGHAN 1959: 101] より)

cano 語のように, true pronoun/number pronoun と分ける必要はないという人称代名詞のシステムをもっている。

さて, この図式の中で, 1st. incl. du. は, マイナス複数性となっている。彼によれば, 話し手と聞き手がそれぞれ単独の個人であるが故にマイナスであるというわけであるが, 説明はやや苦しい。しかし, Thomas のものよりも明らかに簡素化されている。

2.3. Gilyak 語の場合

Austerlitz は日本で集めた Gilyak の人称代名詞の資料から, McKaughan のように3つの要素のプラス・マイナスで弁別しようとした [AUSTERLITZ 1959: 102-109]。

- (1) ego が含まれるかどうか
- (2) 会話場面にいるかどうか
- (3) 焦点がしぼられているかどうか (focus/spectrum)

の3要素であり, 図3のような図を提出した。彼によれば, 1st. incl. pl. は ego が含まれており, 会話場面において, 焦点がしぼられていない場合 (miřn) になる。ただし, Austerlitz は, ñin/miřn の図中の位置のあてはめちがいをおこなっている。すなわち, ñin: 1st. excl. pl./miřn: 1st. incl. pl. であるにもかかわらず, ñin: present, spectrum, ego/miřn: not present, spectrum, ego としている。彼は present/not present のあてまちがいをしている。それは次のような事情によるのかもしれない。すなわち, 彼は miřn ŋafq が“私達の友”の意であり, 実際は叙事詩や民話のヒーローをさしていることから, miřn ŋafq を not present と考え, さらに miřn が not present であると誤解したことにもとづいていると考えられる。実際は, むしろ ŋafq が not present の要素をもつのであって, miřn が not present の要素をもつのではない。彼の思いちがいであると考えて図では訂正しておいた。

それはさておき, McKaughan の要素と比較すると, 会話場面にいるかどうかは,

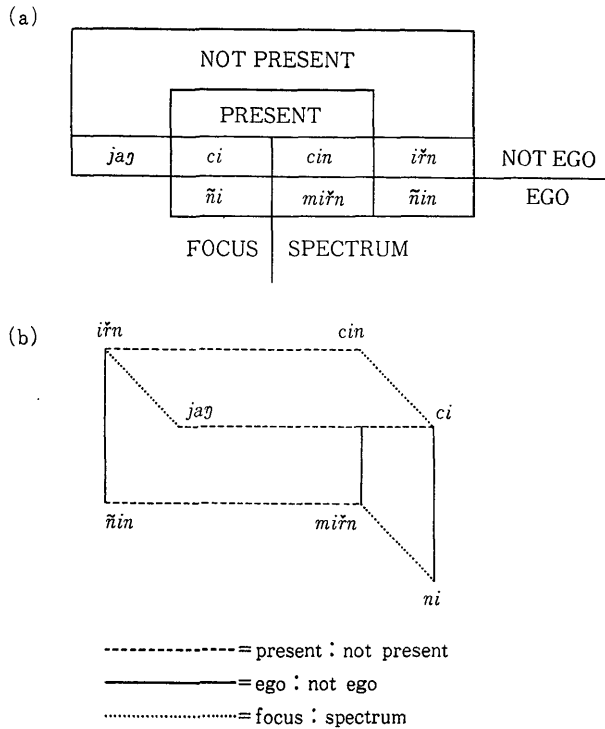


図3 Gilyak 語の人称代名詞 ([AUSTERLITZ 1959: 105] より)

話し手を除けば聞き手しかなく、結局は McKaughan の聞き手がいるかどうかと同じことをさしていることになる。また、焦点がしぼられているかどうかは、複数性と内容的には同じものをさしているし、この場合 (1st. incl. du. がない場合) は単に単複の区別のいいかえにすぎない。会話場面に着目したのは面白いが、そこには話し手と聞き手しかいないのであれば、より直接的でわかりやすい聞き手という要素をとった方がよいと私には思われる。また、焦点がしぼられているかどうかも、従来の単複の区別で充分であると思われる。それゆえ、わざわざ異なった特徴を提示する必然性をこの分析は欠いていると思われる。

2. 4. Hanunóo 語の場合

フィリピンの Hanunóo 語の人称代名詞を Conklin が分析している [CONKLIN 1962: 134-135]。Conklin の分析は McKaughan のそれと基本的に同じであるが、その提示の仕方はかなり洗練されている。彼は同じく 3 つの特徴のプラス・マイナスで弁別できるとしている。その特徴の 2 つまでは McKaughan と同じであるが、3

minimal membership : nonminimal membership (M : \bar{M})
 inclusion of speaker : exclusion of speaker (S : \bar{S})
 inclusion of hearer : exclusion of hearer (H : \bar{H})

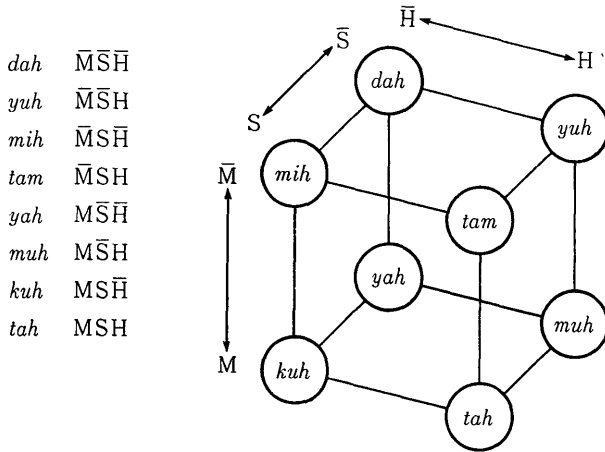


図 4 Hanunóo 語の人称代名詞 ([CONKLIN 1962: 135] より)

番目はその表現をかえている。すなわち、「最少の構成員からなっているかどうか」を「複数性をもつかどうか」のかわりの弁別特徴として用いている。1st. incl. du. は彼によれば、MSH (最少の構成員で、話し手と聞き手も含まれている) ということになる。McKaughan の複数性よりはうけ入れやすい特徴となっている。また、図化も Conklin の説明を上手に表現しているが、すでに Austerlitz にその原型はみられるものである。

2.5. Tzeltal 語の場合

中米マヤ諸語の内の一つである Tzeltal 語の人称代名詞の分析を Berlin が行なっている [BERLIN 1963: 1-5]。彼は Conklin の Hanunóo 語の人称代名詞の分析を基礎にしているが、数に関して Tzeltal 語は少し異なっているため、それに合うように Conklin の分析を変更している。すなわち、Tzeltal 語では、数は 1 人 / 2 人あるいはそれ以上 / 3 人あるいはそれ以上という 3 つの区別がある。これを Berlin は specified minimal membership として、M1/M2+/M3+ (+はそれ以上をしめす) のように区別した。

実のところ、Tzeltal 語の場合は特殊な例である。1 人 / 2 人 / 3 人以上ということであれば、単数 / 双数 / 複数という従来の区別で充分であった。ところが、2 人またはそ

れ以上あるいは、3人あるいはそれ以上というのは、いわゆる dual-plural, trial-plural である。この場合、trial-plural は単に複数としてよいが、dual-plural は双数にも複数にもすることのできない中間の数の概念である。私見ではあるが、dual-plural は双数または複数になるまさに中間形態でありどちらか (trial-plural が複数としてしっかりと成立すると dual-plural は双数になり、trial-plural が消えてしまえばそれは複数になる) に安定する遷移形態であると考えられる。

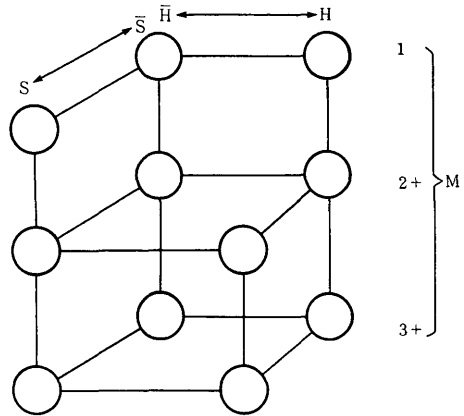


図5 Tzeltal語の人称代名詞の構造 ([BERLIN 1963: 4] の図を簡素化した)

このような特殊な例をあつかうために Berlin は先にのべた specified minimal membership という要素を用意しなければならなかった。

2.6. Indonesia 語の場合

Krupa と Altmann [KRUPA and ALTMANN 1961: 620-625] は Indonesia 語の人称代名詞を分析したが、それはこれまでに述べた例とは少し異なったものである。すなわち、彼らは次のような4つの特徴を考えた。

- (1) 会話に参加しているかどうか (present/not present)
- (2) 人の数が限定されているかどうか (limited/not limited)
- (3) 聞き手が含まれているかどうか (inclusion/exclusion of hearer)
- (4) 人の数の限定において2面性をもつかどうか (bivalent/not bivalent)

この4つの特徴で図6のような区別をした。(1)は Austerlitz の場合と同じように1人称・2人称の組と3人称を区別する基準であった。(3)は、1人称と2人称の区別をむしろ聞き手がふくまれるかどうかで立てた基準である。そのため、普通は 1st. incl. pl. となる kita を 2nd. incl. pl. としてあつかっている。確かに kita は話し手も聞き手も含まれているため、2人称を中心として、話し手の incl./excl. の区別をすることも可能である。

(2)は単に単複の区別のおきかえにすぎない。(4)は、2人称の、普通は複数に含められる kamu が、単数にもつかわれることから立てられた基準である。そして、実

P̄		P				
L̄	L	H̄		H		
mereka	dia	L̄	L	B̄		B
		kami	aku	L̄	L	kamu
				kita	engkau	

図6 Indonesia 語の人称代名詞 ([KRUPA and ALTMANN 1961: 622] より)

はこの kamu が単複の両方につかわれるということの重視が、やや奇妙な成分分析の出発点になっている。

この2人称の複数が単数に用いられる例は決して少なくない [HEAD 1978]。それ故にこの分析は決して特殊な例をみつかったのではない。しかし、このような例は広くみとめられるにしても、人称代名詞のシステムからみれば一種の形の崩れと考えられる。そして、英語のように thou が消失し you のみになるような類型の変化の動因になったり、あるいはバスク語のように、複数形は単数の敬称となり、その穴うめに、新たな複数形をつくり出し類型としてはもとのものと同じであるという例 [下宮 1979: 260-261] も知られている。このように、複数形が単数にも用いられる例は、変化の動因とみることができるが、人称代名詞のシステムとしては「崩れ」とみた方がよいと思われる。

2.7. Subanon 語と Samoa 語の場合

Brichoux [BRICHOUX 1977: 163-165] は、フィリピンの Subanon 語と Samoa 語を材料に人称代名詞を再考しようとする。すなわち、話し手 (S) と聞き手 (H) 以外に会話に参加していない人 (O) を加えて彼は分析する。すると、1st. incl. pl. は S+H, 1st. excl. pl. は S+O であり、S+S のような複数形は理論的に考えられな

表2 Subanon 語と Samoa 語の人称代名詞 ([BRICHOUX 1972: 164] より)

plural	H	H+S	S	S+O	O		H	H+S	S	S+O	O
	amu				ilan		outou	tatou		matou	latou
singular	ika		akon		yen		'oe		a'u		ia
unnumbered		ita		ami		dual	oulua	ta'ua		ma'ua	la'ua

Subanon 語

Samoa 語

いというわけである。そこで表2のように分析してみせた。そして、Subanon 語では、1st. incl. pl. と 1st. excl. pl. はむしろ数にかかわらず、HかOのいずれかを含むことによって区別されていると彼は考え、unnumbered という項目をつくった。

一人称には、二人称や三人称と同様な意味での複数が存在しないことは理論的に肯首できる。しかし、それは Brichoux がはじめていったわけではなく、すでに何人もの人がそれにふれている。たとえばアメリカの言語を述べる中で Boas もその点にふれている [Boas 1911: 39]。

その点を認めたとしても、彼の説になお一考の余地があるように思える。たとえば、Subanon 語の ita/ami の対立はある意味において彼の指摘するように H/O の対立であるのは事実である。しかし、一方で、ami は同時に akon と対立し、それは単数/非単数の対立ではないであろうか。この点をいくつかの点から考えてみよう。

まず、すぐ目につく点からはじめると、何故、Subanon 語では unnumbered という項目が必要であり、Samoa 語では必要でないのか。彼の表を次のように変えると、この2つの言語の代名詞のシステムはさらに説明しやすくなるのではないだろうか。すなわち、ita と ami をともに複数とすれば、unnumbered という項目は不要であるし、Samoa 語は話し手を除いて双数がさらに加わっただけであると考えることができる。それは、ita, ami の非単数性に着目し、それを複数と読みかえることによっている。ita, ami は実際に双数ではなく、それ以上の人々をもさす点を考えれば複数と考えるよりははずである。

今ひとつは、彼の表は左右対称の美しい表となっているが、実はその中の意味を考えると左右対称ではない。すなわち、H と O とは同等のものではないのである。H は常に限定的なものでありながら、O は非限定的なものである。あるいはOはS, Hをのぞいた残りの集合、すなわち余集合である点で、S, H とは区別されるものである。そして、S と組み合わせられる H(S+H 中の H)は左側の H と一般には同じでありながら、S と組み合わせられる O は右側の O とは同じではない。ある点において話し手と共有される要素をもった O でなければならない。この点をより明らかにする

表3 Brichoux の表を改作した表

	H	H+S	S	S+O	O	H	H+S	S	S+O	O
plural	amu	ita	/	ami	ilan	outou	tatou	/	matou	latou
singular	ika	/	akon	/	yen	'oe	/	a'u	/	ia
dual						oulua	ta'ua	/	ma'ua	la'ua

表4 全てを S. H. O. で表記された表

	(a)	(b)
ika	H	H
amu	$(1+n)H+(m-1)Oh$	H/H+O
ita	$S+(1+n)H+(m-1)Oh+(P-1)Os$	S+H/S+H+O
akon	S	S
ami	S+POs	S+O
ilan	$(1+P)Oo$	O
yen	Oo	O

(m, n, p=1, 2, 3,)

ためには、単数/複数 (Samoa 語の場合では双数も) という項目をはずして、総てを S, H, O で書きあらためるとよい。正確に記述するために O を Os (話し手とある要素を共有するが会話場面にいない人), Oh (聞き手と共有要素をもつ他の人), Oo (Os, Oh 以外の人) に区別し、数の係数を入れると表4の (a) ようになる。これを Brichoux ように、O を区別せず、数的な係数をはずしてしまうと (b) のようになる。このように複数という項目の影にかくれていた部分が明らかになると、先にみられた左右対称性はもはやそこにはない。

それでは、これをどのように考えればよいのであろうか。それは後に述べるが、結論だけを述べておけば、ami は akon の複数と考えればよいということになる。

3. 人称代名詞の etic な研究

Buchler と Freeze の人称代名詞の研究 [BUCHLER and FREEZE 1966] は、etic な研究をめざしての予備的な報告とみてよい。約20の言語を用いて、人称代名詞の示差的特徴を抽出することにあつた。彼女らの前提には、emic な分析を通じて etic な示差的特徴を把握することができ、ひるがえって、それぞれの言語はこの etic な示差的特徴から限られた数のセットがもちいられているという考え方があるようである。それは音韻論のアナロジーとみてよい。そして、彼らの目的とするところは、意味論よりも実用論の方にかたむいている。すなわち、人称代名詞を親族呼称や役職名、名前などとひとつの意味領域を構成するものとみている。実のところ、このことが彼女らの研究を不満足なあるいはあまり成功したといえない結論にみちびいた。しかし、彼女らの不成功はある意味で示唆的であり、彼女らの研究の内容をみておくことは大切であると思われる。

Buchler らよりも少し前に, Forchheimer [FORCHHEIMER 1951] によって, 90以上の言語を用いて人称代名詞の類型論がなされている。彼は人称と数の成分に限り, 形態論的な類型論を展開した。この研究は, 本論での類型論とは直接関係はないが, 変化の過程を考える上では重要な研究である。

1978年になって, Greenberg を中心として行なわれていた Stanford Language Universals Research Project のひとつとして, Ingram は人称代名詞をとりあげた。彼は先の Forchheimer の資料を用いて再考した。Ingram は単に人称代名詞の人称と数について考察しただけでなく, 文法的な側面にもふれているが, ここでは本論に直接的に関係する部分のみをとりあげることにする。

多くの人称代名詞をあつかったものには, Haaksma [HAAKSMA 1933] のインドネシア地域の人称代名詞を集めたものがある。これはむしろ資料として用いることにする。また, Tibeto Burman の pronominalization をあつかった学位論文がある [BAUMAN 1975]。目的は本論とは異なるが, 材料としては人称代名詞を多くあつかっており, これも資料として本論で用いる。

さらに, Majtinskaja [1969]²⁾ が多くの言語の人称代名詞を検討したという [BECKER and OKA 1979: 247] が, ついにこれを見る機会にめぐまれなかった。

また, 谷の対人関係語に関する研究 [谷 1979] は, ある点では本質的な問題をはらんでいるため, ここでとりあげておくことにする。

3. 1. Buchler と Freeze の研究

Buchler と Freeze [BUCHLER and FREEZE 1966] はヨーロッパ系の言語を中心に, アメリカやフィリピンの言語を加えて約20の言語をそれぞれ emic に分析し, それらを通しての etic の示差的特徴を抽出することを試みた。そして, その特徴を2つに分け, 次のように整理してみせた。

(A) 形式的特徴

1. 最少構成員かどうか
2. 話し手を含むかどうか
3. 聞き手を含むかどうか
4. a. 最大構成員かどうか (構成員の包含の幅において)
- b. // (特定のな数において)

2) Majtinskaja, K. 1969 *Mestoimenija v Jazkax Razmyz Sistem* (Pronouns in languages of different systems). Moscow.

(B) 社会的・文化的特徴

1. 連帯性 (solidarity) をもつかどうか
2. 男性かどうか
3. 人であるかどうか
4. 話し手の近くにいるかどうか

彼女らは、徹底的に二項対立的に処理しようとした (yes/no の形に還元した) ために、その分析はやや奇妙な印象を与えるかもしれないが、彼女らがいわんとすることは明瞭である。形式的特徴のはじめの3項目は Conklin のところでみた通りのものである。4. a. は、Totona 語において、3人称は単複の区別がないため、これを他と区別できるようにたてられた特徴である。すなわち、単数や双数、複数などにおいて、構成員の含み方が最大であるというのは、そのいずれでもいい、あるいは区別しないということを示している。これは、先の Krupa と Altmann の Indonesia 語にみられた2面性という要素に対応するものである。4. b. は、Berlin の Tzeltal 語の特定の最少構成員という要素を二項対立に合うように分解したために出現した特徴である。すなわち、単数は最少であって最大でない、2 またそれ以上という数は最少でも最大でもなく、複数は最少でなく最大である構成員からなるというように表現するためである。

これらの特徴は、一見してはわかりにくく、そして、何んとなくたどたどしい感じのする分析である。

一方、社会的・文化的特徴をみてみると、はじめの項目は Brown と Gilman [BROWN and GILMAN 1960] によって提出された solidarity の概念を用いている。かなり広くみとめられる、2人称の丁寧な代名詞と親しみの代名詞を区別するための特徴である。2番目は、スペイン語に典型的にみられる性の区別をとりあげている。3番目は、ペルシャ語の3人称にみられる非人間である代名詞を区別するためのものであり、4番目は Hindii 語の3人称にみられる、話し手に近いかどうかを区別するための区別である。この最後の2項目は、指示代名詞のシステムと強い相関性をもつものであると思われる。いずれも3人称にのみ出現することがそれを示唆している。

このように彼らの特徴をみるときその結論は材料とした言語に大きく制約されることが読みとれる。それは、かなり簡素な人称代名詞のシステムしかもたない言語を母国語としているためのハンディでもあるが、——たとえばもっと複雑な人称代名詞のシステムを常用している私達日本人であれば、はじめからこのような結論がたいして意味のないことを見通せるが——同時に、日本語やインドネシア語、タイ語のよ

うなより複雑な代名詞のシステムをもつ言語を含めなかったことにある。たとえばタイ語の場合、形として重複するものもあるが30の代名詞が数えあげられている [三上 1981: 119-122]。三上はタイ語の人称代名詞を考えるにあたって、人称、性、数のみでなく、話し手と聞き手の年齢の問題（相対的年齢と絶対的年齢）、親密さ、敬意の程度、上品さの程度、形式的かどうかといった点をとりあげている。彼自身は、人称代名詞のみが問題であるのではなく、タイ語における呼称体系を問題としてとりあげており、具体的な場を設定しての分析は、非常に説得力のあるものである。三上の仕事は、これまでの呼称の問題では非常にすぐれたもののひとつではありながら、なお完成されたものとは思われない。実のところ、従来のような方法論・分析の仕方を踏襲しているかぎり、三上以上には成果が上らないのではないかと思われる。

Buchler は後に Nahuatl 語とスペイン語を話す二重言語生活者の人称代名詞のシステムについて分析している [BUCHLER 1967: 37-43]。Buchler はこのようにいよいよ呼称の問題へと入り込んでいった。しかし、この呼称の問題は非常に難しい問題をはらみ、先の三上論文でもなお問題をのこしている。私は率直な意見として、人称代名詞の類型論にはこのような実用論的要素を入れては失敗すると考えている。彼女らのいう社会的・文化的特徴は実用論の問題として、別の形で検討しなければならぬと考えている。Buchler らの試みは途中で挫折したと思われる。何故なら、それ以後、この種の論文は発表されていないからである。実用論を世界的な広がりで行なうことはやはり無理であったのであろう。

3.2. Forchheimer の研究

1951年にコロンビア大学へ提出された学位論文、“Category of Person in Language” がそれである。1953年にベルリンから出版されたが、私はもとの学位論文しかみていない。

Forchheimer は普遍的な成分と考えられる人称と数のみをとあげた。ただし、彼は数については単数/複数の対立を重要視し、双数や3数はむしろ非単数として複数の中に入れて（下位の分類では用いているが）。それは、彼の視点が形態論になり、複数の語構成の類型論から出発していることにある。彼の区別した複数の形態論的類型は次のようなものである。

- i) 形態的複数 (morphological plural): 複数をしめず接辞が規則的に付加するもの。
- ii) 語彙的複数 (lexical plural): 母音や子音が変化して複数形をつくるもの。

iii) 合成的複数 (composite plural): I-thou のように、単数の人称代名詞が組み合わされて複数形がつけられるもの。

Forchheimer はこれらをもちいて類型化を行なった。そして、彼は9つの類型を提示した。

1. 形態的複数をもつ言語
2. 少なくとも1人称は語彙的複数からなる言語
3. 1人称に形態的複数と語彙的複数が共存する言語 (双数, あるいは包括的/排除的の対立がみられる2つ以上の複数形が存在し, それらが語彙的複数と形態的複数からなっている言語)
4. 1人称に合成的複数と, 形態的または語彙的複数が共存する言語
5. 1人称の包括的, 排除的の複数に2つの合成的複数がみられる言語
6. 1人称の包括的, 排除的の複数が言語的には同じであるが, 少し変異した形で構成されている言語
7. 1人称の包括的複数が2人称の複数の変異形で構成されている言語
8. 1組の人称代名詞をもっているが, それに加えてさらに合成的複数が加わる言語
9. 3種類の複数形よりも少ない複数形をもつ言語

Forchheimer の類型をみていると、先の3つの複数形の区別以外にははっきりとした原則はないようにみえる。そのため、かなり散漫な印象をうける。それは、基本的には数の概念をあいまいにしたことにあるようである。この類型論は、いかにして非単数形ができあがっているかの類型論であり、人の概念の類型論ではないことに注目しておく必要がある。それ故、この類型論は、むしろ人称代名詞の変化・発展の問題にはきわめて重要な示唆をあたえてくれる。

3.3. Ingram の研究

Ingram は先の Forchheimer の資料を用いて、彼とは違った見方で分析しようとした。Forchheimer の資料が人称と数の区別だけでなっており、Ingram は、彼と同様にこの点のみに焦点を合わせて分析した。ただし、彼の注目するところは人称代名詞における普遍性の整理あるいは発見であったため、これまでのものとは少し表現が異なっている。

さて、Ingram は Forchheimer の資料から71の言語をとり出し (20ぐらいの言語はおとしていると思われる)、まず、いくつの人称代名詞を各々の言語がもつかによっ

表5 Ingram の一般的な類型

6分型 (A)			11分型 (A)		
I	we		I	we-2-incl.	we-incl.
thou	you			we-2-excl.	we-excl.
he	they		thou	you-2	you
			he	they-2	they
7分型 (B)			9分型 (A)		
I	we-incl.		I	we-2	we
	we-excl.		thou	you-2	you
thou	you		he	they-2	they
he	they				

て整理した。そして4分型から15分型までの10種類の類型を見いだした。さらに、それぞれの類型の中で、構造的に異なるものを区別し、それにAからCの符号をつけ、合計21の類型を立てた。その上で、彼は一般的な類型と非一般的な類型を区別した。その根拠は出現頻度であった。その結果、4つの類型を一般的な類型とみなし、これらの類型をもとにして人称代名詞の人称と数についての普遍性を検討した。念のため、この4つの類型をここにしめしておこう。

Ingram は以上のような操作の後、それらを分析して次のような普遍性を提示した。

1. どの言語も、少なくとも4つの term はもっている (I, we, thou, he の4種で、朝鮮語, Kamanugu 語がその例である)。
2. 数については3つのシステムがある。
 - a. more-than-one (1, 1<)
 - b. more-than-two (1, 2, 2<)
 - c. more-than-three (1, 2, 3, 3<)
3. 人称については2つのシステムがある。
 - a. three-unit system ($\{+S, \infty H\}$, $\{-S, +H\}$, $\{-S, -H\}$)
 - b. four-unit system ($\{+S, -H\}$, $\{-S, +H\}$, $\{-S, -H\}$, $\{+S, +H\}$)

はじめの項は71の言語の中で最少の term をもつものをいったものである。そして2番目は要するに単数/双数/3数/複数の区別があることをいったものにすぎない。しかし、3番目は、かなり重要な指摘である。すなわち、aはこれまでの1人称/2人称/3人称の区別と同様であるが、bはさらにもう一つの人称があるという指摘である。すなわち、これまで 1st. incl. とされていたものを独立した人称と認めたことである。これまで、1st. incl./excl. という形で処理してきたヨーロッパ文法からやっと少し抜け出した視点を彼は示したことになる。しかし、彼自身、1st. incl. を独立した人称と理

論的には認めたが、資料の提示の際にはあいかわらず *Ist. incl.* としてしか表現していない（表5参照）。恐らく、彼自身、その意義を十分に理解していなかったのではないと思われる。

Ingram の欠点はいくつかあるが、そのひとつとして一般的な類型として出現頻度をを用いたことであろう。Greenberg が多用した方法であるかもしれないが、そこには積極的な理論的根拠はない。それは単に多いというだけであり、まして71ほどの少ない言語を対象にしたとき、このような方法論では重要な類型が抜け落ちることも充分に考えられる。たとえば、フィリピンにみられる Hanunóo 語のような類型は Southern Paiute 語として71の中に入っているが出現頻度の低さから、彼の検討の範囲から欠落しているのもその一例である。

3.4. 谷 の 研 究

谷の研究は、対人関係語を名称と対象との同定のプロセスに着目して分類してみた。そして、その分類の有効性を日本語を例にして提示した [谷 1979: 135-180]。それは、これまでになくユニークな視点で、それによって、異なった、より明快な解釈を対人関係語についてくださるようになった。そして、その中で彼は本論にかかわる重要な問題を指摘する。すなわち、話し手/聞き手という示差的特徴で分類され、相互に交替されるようなセントリック・レラティブな人称代名詞の枠組は普遍的なものではないと。

谷は名称をまず固有名称と分類名称に分ける。そして、分類名称をさらにセントリックな分類名称とノン・セントリックな分類名称に分ける。後者は固有属性に着目された分類名称で、たとえば職業分類名称はこれに属す。一方、前者は関係属性に着目された分類名称であり、分類の集合の中にそのメンバーが含まれているという特徴をもつ。そして、セントリックな分類名称はさらにレラティブな分類名称とアブソルートな分類名称に分ける。前者は分類の視点が人称代名詞のように推移するものをいい、後者は「二十三期生」といった名称や、日本語の家族の最年少者を原点としての親族呼称のように、分類の視点が推移しないものをいう。この分類をベースとして、「宅」、「うち」、「自分」といった代名詞的機能をもつ語を分析し、これらがノン・セントリックな分類名称であるとする。また、「そち」「そなた」「あなた」などは相対的场所についての指示代名詞が対人関係語に転用されたもので、「本来的に、この語群は、話者対聞き手という示差的特徴で分類された語群ではない。」といい、そして、次のような結論に達する。「実は印欧的な人称代名詞的分类は決して普遍的な分類ではなく、

セントリック・レラティブな分類の一つにしかすぎない」[谷 1979: 168-169]。そして、「日本語におけるそれ(対人関係代名詞)は、むしろノン・セントリック・アブソルートな分類名の一特殊形をも含む、様々な代名詞化した名称を、その対象指示力といったプロクセミックな配慮、またステイタスの上下からみた敬意の表明の必要等から判断して、個々のケースに応じて語選択をしている。」[谷 1979: 169]とする。

谷のこうした主張に対して、私は少し異なった立場をとる。すなわち、人称代名詞というものは、セントリック・レラティブなものであって、話し手/聞き手という示差的特徴で区別されるものであり、それらは何よりもまず、話し手または聞き手をさす語群であると考ええる。このように考えると、谷の問題とする点はむしろより明快に説明が可能になると私には思われる。

日本語の場合のように、人称代名詞にさまざまな変異をもつ言語はむしろ少ない。インドネシア語やタイ語、トルコ語、朝鮮語といったものは同様の傾向をもつ。しかし、印欧語においても、ラテン系の言語やドイツ語、オランダ語においても、2人称に2つの形をもち、日本語の場合と基本的には同じ過程で語の選択を行なっている。人称代名詞がこのような実用論的な要素をもつことはむしろ普遍的なことなのである。それは、呼称体系の中に人称代名詞が含まれており、呼称体系そのものは、まさに実用論の問題であるからである。ただ、日本語などは、人称代名詞的用語が豊かであり、より複雑な様相を呈しているにすぎない。そして、むしろ何故日本語などにおいて、このように豊かな用語が特殊に発達したかが問題である。直感的ではあるが、私は、それは文法構造とかかわっていると考えている。主語というものが、文にとって obligatory でないような言語では、人称代名詞は不安定になるということとかかわっていると思う。しかし、この点は今ははぶくとして、日本語などでは、普通名詞やその他の語が代名詞化することは大切である。今、その代表的なものとして普通名詞をとりあげると、変化はつぎのような形でおこる。①普通名詞→②人称代名詞的普通名詞→③普通名詞的人称代名詞→④人称代名詞。そして、谷のいう、「宅」と「お宅」、「うち」と「おうち」というのは、③普通名詞的人称代名詞であり、谷のいう「自分」は②人称代名詞的普通代名詞である。しかし、「自分」と「ご自分」という対であれば、それは③普通名詞的人称代名詞に含められるものである。谷が「たかだか違うとすれば」[谷 1979: 163]としている接頭辞の「お-」や「ご-」が実は非常に大切な機能をになっているのである。そして、「僕」や「君」という語は、すでに普通名詞としての意味をほとんど失っており、もう④人称代名詞と考えてよいであろう。何故なら、「君」にもともとあった敬うべき属性はふくまれておらず、私達は

敬うべき対象に対して「君」を用いてはおらず、むしろ敬うべき対象ではない人に用いている。同様に「僕」には「しもべ」という意味は全く意識されていない。もとの普通名詞としての属性を失うことによって——人称代名詞化することによって、むしろ「君」の下落化、「僕」の上昇化が可能になり、その穴うめに新たな普通名詞の人称代名詞などが形成されることになるのであろう。そして、こうしたことが多くの代名詞的用語を生まれさせる原因にもなっている。ただし、小さい男の子に「ボクちゃん」とよぶことは、以上の話とは少し異なるものである。これは、親族呼称のセントリック・アブソルートな用法の問題と関係したものである。「ボク」には「小さい男の子の自分」という意味特性が付属している。そのため、セントリックの原点にある小さい男の子をさすために、固有名詞のかわりに用いられるものである。もし、「小さい女の子の自分」という意味特性をもつ語があれば同様な現象が発生したであろう。時に冗談めかして「ワタシちゃん」と小さな女の子に呼びかけるのは、そのメカニズムが存在していることをしめしている。しかし、これが定着しないのは、「ワタシ」には「小さい女の子の自分」というように限定された意味特性がないことによる。

普通名詞と人称代名詞のちがいは、ノン・セントリック・アブソルートであるかセントリック・レラティブであるかにかかわっている。谷は②人称代名詞的普通名詞をも人称代名詞の中に含めた意見と考えてよいであろう。

ついでながら、指示代名詞の「そち」「そなた」「あなた」などでは、①指示代名詞→②人称的指示代名詞→③指示的人称代名詞→④人称代名詞の変化となる。指示代名詞の総てがセントリック・レラティブではないが³⁾、ほんのわずかの例外を除いてセントリック・レラティブであると考えてよい。この場合は、指示的か人称的かのみにかかわっている。それは単に程度の差にすぎない。そして、実は、多くの言語において人称代名詞は指示代名詞から派生したことを考えれば、この変化はそれほど意外なものではない。

残る問題は「河内のワレ」である。これは谷のいうように、「自分」「宅」「うち」と同列の語であり、「おのれ」「われ」は元来、人称代名詞的普通名詞であったと考え

3) ロシア語など[吉田 1981: 83-84]では、話し手や聞き手にかかわらない指示代名詞の体系がある。また、479の言語(方言を含む)の内で1.3%、6例が1つの指示代名詞しかもたず、これらの例ではセントリック・レラティブにならない[吉田 1980: 850-853]。しかし、このようにわずかの例外があるにすぎない。

指示代名詞の発達を考えると、恐らく話し手と聞き手にとってのセントリックな指示代名詞がまず出現した。その後、「これ」というような話し手にセントリックな、すなわち、セントリック・レラティブな指示詞が出現したと考えられる。先の例は、このようなセントリック・レラティブな方向に発達せず、別の方向に進んだものと思われる。

られる。それが人称代名詞化するに際して、河内では「おのれ」または「おんどれ」および「われ」は2人称に分化・定着したにすぎない⁴⁾。

谷と私との根本的な差異は人称代名詞をどのように定義するかにかかっている。谷にあっては、私のいう人称代名詞の普通名詞もふくまれている、この点にある。そして、それは接頭辞の「お-」や「ご-」の評価にも反映される。また別の側面では、日本語の複雑な実用論的な語選択への谷の強いコミットメントに対して、複雑ではないにしても人称代名詞にみられる実用論的な語選択はむしろ普遍的なものであるという私の視点との差である。

くりかえしていえば人称代名詞にとって、話し手/聞き手という示差的特徴、および交替するというセントリック・レラティブな性質は欠くことのできないものである。すなわち、それらは人称代名詞において普遍的なものなのである。

4. etic な意味成分の検討

これまでの研究を概観した際に、少しずつコメントをつけてきた。それらをも含めて、人称代名詞の etic な意味成分をどのように設定すればよいかをこの章で検討しようとしている。そのため、時にはやや基本的な問題にも立ち帰ろうとしている。

4.1. どの意味成分をとりあげるか

Buchler と Freeze が形式的特徴と文化的・社会的特徴に分けたが、私はこの形式的特徴だけをとりあげようと考えている。すなわち、人称と数のみである。それは Forchheimer や Ingram らの立場と同じである。それには2つの理由がある。ひとつは、世界中の言語について、この2つの意味成分のみが普遍的であることである。それらは最大公約数としての成分なのである。そして、他の意味成分は普遍的ではない。もうひとつの理由は、Buchler らが落ち込んだ失敗をくりかえさないことである。彼女らは、文化的・社会的な特徴をも視野の中に入れた。そのために、どのようにも解決の道を失ってしまった。それは、意味論の範囲をはなれて実用論の問題へ入り込んだためである。そして、実用論としての人称代名詞は、まったく異なった視点から研究されなければならないと私は考えている。ここでは、実用論の問題はとりあつか

4) 大阪府の河内地方では、1人称としては「わし(男)」,「わて(女)」が、2人称としては「われ」「おんどれ」「お前」「あんた」が用いられていた。現在では、1人称「おれ」が男の間では優勢になりつつある。いずれにせよ、「われ」は決して1人称には用いられない。河内の体系の中では、1人称と2人称が同じ語で表現されることはない。

わず、より形式的な分析にとどめようと考えている。

このような立場に立つと、Krupa と Altmann が問題とした 2nd. pl. を 2nd. sg. に用いた用法は除外されることになる。すなわち、これは文化的・社会的特徴のひとつだからである。それ故、彼らが分析してみせたような成分はここでは不要ということになる。

4.2. 人称について

4.2.1 人称のシステム

まず、どの言語にも適用可能な人称のシステムについて述べよう。

ヨーロッパ的伝統にしたがえば、人称は 1 人称、2 人称、3 人称の 3 つに分けられてきた。日本では、自称、対称、他称がそれに対応するものであった。しかし、印欧語以外の他の言語では、これだけでは充分でない言語が多くあり、1st. incl. と 1st. excl. の区別を導入して処理されてきた。おそらく、1 人称、2 人称という命名は、単純で使いやすいという実際的な側面もあったであろうが、むしろエスノセントリックな感じがするほどにこのシステムに固執していると私には感じられる。論理的には 1st. incl. が独立した人称であると指摘した Ingram すらもそこから完全には逃げられなかったのもそのひとつの例であろう。

私は一度はヨーロッパ的伝統からはなれた方がいいと考えている。もっと中立的な立場で、ひとつの人称のシステムをここに提出したいと思う。また、同時にこのことが、——実はこの方をより大切なことと考えているのだが——、後の展開には重要な意味をもってくるからでもある。

人称は 4 つある。理論的には人称は話し手と聞き手という 2 つの要素によって決められる。この 2 つの要素がプラス・マイナスで区別されるとき、当然ながら 4 つの組合せができる。それ以上でもそれ以下でもない。そして、そのそれぞれを独立した人称と考えようというわけである。これまで、1st. incl. とされていたものを双称 (Dialoguent Person, 略して D-person) として独立させる。この点がもっとも重要な点

表 6 人称代名詞のシステム

	新しい分類	話し手	聞き手	従来分類
双称	Dialoguent person	+	+	1st. per. incl.
自称	Loquent person	+	-	1st. per. excl.
対称	Audient person	-	+	2nd. per.
他称	Absent person	-	--	3rd. per.

である。

日本語では、これまでの自称、対称、他称に双称を加える。双称という用語は話し手と聞き手の双方という意味である。英語の場合は、1st, 2nd, 3rd, というこれまでの命名では4thというしか仕方ないであろう。しかし、この人称は決して4番目のものではない。また、ヨーロッパの伝統からはなれるためにも、新しい命名が必要であると考へた。そこで、いろいろ考へてはみたが、結局より直接的な命名法がよいのではないかと考へて、次のような用語を提案しておく。双称は *Dialoguent person*, 自称は *Loquent person*, 対称は *Audient person*, 他称は *Absent person* である。これらは少々長いので省略形としての *D-person*, *L-person*, *A-person*, *Ab-person* のような形を普通は用いることにしたい。そして、当然ながら、以後は総て、この用語を用いることにする。

4.2.2 他称 (*Absent person*) について

さて、先のように4つの人称を立てたが、この中で他称は他の3つとはかなり異なった性質のものであることを述べようとしている。

他称についての代表的な意見は Lyons にみられる。すなわち、自称と対称とは会話に参加しているが、他称はそれに参加していない。その意味では、他称は否定的に定義されたものである。たとえば、他称がなくても指示代名詞があればそれですまされるものであり、実際に英語のような他称をもたない言語も数多くある [Lyons 1977: 638-639] という。

Forchheimer [FORCHHEIMER 1951] のあげた例の内にも、Lyons が述べるような例がある。たとえば、他称が指示代名詞であるものに *Kwakiutl* 語や *Tonkawa* 語、*Shoshone* 語があるし、他称の単数が標記されない(無標である)例としては *Lakota* 語、*Sierra Popoluca* 語などがあげられている。また、彼のあげる資料の中には他称について記述されていないものも散見される。なお、Ingram は1953年にベルリンで発行された本を用いており、私は彼の1951年の学位論文を用いているため、内容については少し異なっているようであるが、彼は90以上の言語を資料としているのに対して Ingram は71に限ってしまっている⁵⁾。Ingram は Forchheimer の資料をつかうといいながら、その総てを用いているのではないことは確かであり、それについては何もふれていない。彼が用いなかった例というのは、先にあげた *Kwakiutl* 語や

5) Ingram の本文中でまとめた類型別の言語数の表1 [INGRAM 1978: 218-219] では合計が71となっているが、Appendix [INGRAM 1978: 242-245] では69しかなく、*six-person system* の B に2つ、C に1つ、さらに *Eight-Person system* の C に1つが欠落している。

Lakota 語, Sierra Popoluca 語, さらに他称が記述されていない例であるらしい。Ingram はこの点をもう少し掘りさげることが必要であったのではないかと私には思われる。

ところで、他称が指示詞のシステムに含まれる例は、Forchheimer があげた例にとどまらない。世界中、あちこちに散在する。たとえば日本語では、翻訳語である「彼」「彼女」「彼ら」というものをはずして考えると、もともとは「あの人」や「その人」のように他称は指示代名詞の世界に入ってしまう。また、Sanskrit の他称も指示詞であることはよく知られた例であるし、Buchler と Freeze があげた例の中では Hindi 語 [BUCHLER and FREEZE 1966: 98] の他称に明らかに指示詞の性質が混りこんでいる。さらに、Indic の Balaspuri 語 [BAILEY 1975 (1915): 236], Tibeto-Burman の Kagan 語 [BAILEY 1975 (1915): 93] や Lhôtâ 語 [GRIERSON 1967 (1903): 297], Dravidian の Kaya 語 [TYLER 1969: 60], Munda の Sautali 語 [GRIERSON 1973 (1906): 42] など他称は指示詞である。Altaic のトルコ語の他称は明らかに指示詞と関係しているし、Australian の Maung 語 [CAPELL and HINCH 1970: 59] では、名詞のクラスに対応した他称があり、指示詞と共通した形態素をもち、他称はむしろ指示詞の体系の内とみることができる。そして、このことは、他称以外はクラスとかかわらない体系をもっていることを考えるとより明瞭である。

このように、さまざまな言語グループにおいて、他称が指示の体系の中に含まれる例が見いだせる。細かくさがせば、この例をさらに増やすことは可能であるが、もはや必要ないであろう。他称は総ての言語に適用できる概念ではないのである。

すでに述べたように自称・対称と他称の間にはかなりの違いがある。他称の人間という要素をはずすと、それはまさしく指示詞の世界に入ってしまう。指示詞と人称代名詞の発生に関する推論を行えば、まず指示詞の方が先に成立していたと考えられる。そして、会話場面での状況に応じて恐らく、指示詞と関係しながら自称・対称(非自称)が形成されたのであろう。しかし、自称・対称はやがて独立した体系として指示詞の体系から切れて定着していった。一方他称は、指示詞から人称詞にいたるさまざまな変化の段階でとどまっている。先にあげたように、全く指示詞のままのものから、指示詞の形態素をとりこんで人称詞を形成しているもの、時に指示詞に特有の話し手との距離による分化という性質までとりこんでいるもの、あるいは指示詞の体系の中で人間/非人間の区別がされ、それがみかけ上、人称詞の体系の一部を構成しているものなどなど、さまざまなものが出現する。泉井が指摘するように、人称代名詞のよく発達した印欧語においてさえ、他称は起源的には指示詞にもどるといふ [泉井 1978: 26]。

類型論的にいえば、独自の他称をもつかどうかを基準にして2つの類型に分けること、あるいは、他称と指示詞との遷移型というものを加えて3つの類型に分けることがひとつの考え方である。しかし、実際の資料での検討では意外に面倒な操作をほどこなさなければならず、むしろ不明という言語がかなりの数で出現すると予想される。特に歴史的な観点を加えると、ますます混乱におちいってしまう。

私は、この他称を *etic* な意味成分からはずそうと考えている。それは次のような理由による。

1. 基本的には、他称は他の人称とくらべて消極的な概念であり、会話場面での人の概念を考える上では、その重要性はきわめて低いと考えられること。
2. 他称はどの言語にもみとめられる人称ではないこと（双称もどの言語にもみとめられるものではないが、会話場面での人の概念の考察には、自称・対称と同様に重要であるため考察の範囲内にとどまる）。
3. 先にのべたような類型論を展開するにしても、あつかえる資料の精度を考えれば、数多くの不明の場合が予想され、実際的な面から現実性を欠いており、この類型論はここではとらない。
4. むしろ、他称を落すことによって、簡素化が進められ、より本質的な問題が明確になること。
5. このように他称を排除しながらも、一方では他称は対称の延長上にあり、人称と数のみを考察する限りにおいては、多くの例においては対称より類推することは可能であること。

このように理論的な側面と実際の側面から他称を、*etic* な意味成分より落すことにする。

4.3. 数について

4.3.1 数のシステム

まず、人称代名詞にかかわる数の概念について整理しておこう。このことは、実は、数の概念の変化に重要なものであるが、ここでとりあつかっておく。

直感的ではあるが、数という概念が形成される以前のものが存在するであろう。やや矛盾的表现であるが、これを未分化数 (*non-differentiated number*) としておく。そして、例外もありえるがまず単数 (*single*) が分化してきたと考えてよいであろう。それに対応するものである非単数 (*non-single*) としての複数 (*plural*¹⁾ が出現する。しかし、この複数単数は単数を除いた残余集合であり、さらに分化する。すなわち、限定

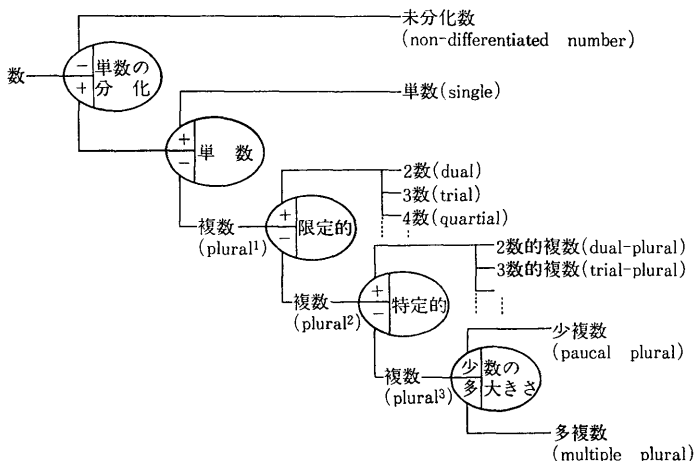


図7 人称代名詞にかかわる数の概念

的な数の概念が単数に続いて出現する。2数 (dual)⁶⁾や3数 (trial) がそれらである。それらに対応するのは非限定的な複数 (plural²) である。この複数にはさらに特定のな数が含まれている。2数的複数 (dual-plural) や3数的複数 (trial-plural) がそれらであるが、これらの数は、Tzeltal 語のところで述べたように、限定数と複数 (plural²) の中間的なもので、安定した形としてはどちらかに変化してゆくものである。ここで出現した残余集合である非特定の複数 (plural³) はまれではあるがさらに少複数 (paucal plural) と多複数 (multiple plural) に分けられることがある。これらの複数は時に他の数への変化の過程として現れるものであろう。

さて、本論に用いる数のシステムにおいて問題となるのは、フィリピンの言語にみられた双称の数についてである。Thomas は Ilocano 語では simple/‘plus’ という成分を、McKaughan は Maranao 語では複数性をもつかどうかという成分を、Hanunóo 語では Conklin は最少構成員かどうかという成分を考えた。Buchler と Freeze は2数を処理するために最大構成員であるかどうかという成分をさらにつけ加えた。また Ingram はこうした点にはなんらの配慮もはらわず、単純にこれまで通

6) 2数 (dual) は、従来、双数と訳されてきた語であるが、ここでは2数という語を用いることにする。ひとつは、2数以降の trial は3数、quartial は4数というように双数のような特別な名称をもたず、統一性を欠いているからである。ただし、単数を1数としないのは、単数/複数という対がもっとも頻繁に出現し、対概念としてすでに定着していることによる。また、双称という命名をおこなったため、双数・双称というまぎらわしさをさけるためにも効果があると考えたためである。

なお、泉井は対数 (numerus paralis) と両数 (numerus dyadicus) を区別しているが [泉井 1978: 11]、これらは2数の下位分類であり、ここでは区別する必要のない数であると考えられる。

りの単数, 2数, 3数, 複数という数を採用している。そのため, Southern Paiute 語に整合性は認められないようになってしまっていた。

こうした emic な研究では Conklin の表現がもっともわかりやすいと思うが, これを etic の成分とするには, あまり適当であるとは思われない。しかし, Ingram のように単純に処理するわけにもゆかない。私はそれらの中では,むしろ McKaughan の複数性という考え方をとり, それを発展させようと思う。すなわち, 本論では, 単数性, 2数性, 3数性, 複数性という数の概念を用いたい。それは, たとえば, 単数性は決して単数そのものではなく, 単数という性質をもっているかどうかにかつ力点がある。自称, 対称については, そのままそれぞれの性質をもつため問題はない。双称のみに, この問題は関係している。

Ilocano 語や Maranao 語, Hanunóo 語にみられる双称は, 双称・単数性, 双称・複数性として区別され, 他の人称と整合性をもつ形で配列することができる。また, Brichoux の Subanon 語や Samoa 語では, 双称に単数性をもつものがなく, Subanon 語では双称・複数性しかなく, Samoa 語では双称・2数性, 双称・複数性の2語があることになる。

このような数のシステムを用いると, emic な分析と矛盾を生ずることなく処理できるだけでなく, 実際に Lakota 語のようにその妥当性が確かめられる場合もある。Lakota 語では動詞に単複を区別する接辞がつく(単数は ϕ , 複数の場合は -pi)。Buchel は双称・単数性の代名詞を2数としているが, この代名詞には複数の接辞はつかない [BUCHEL 1939: 20]。すなわち, 他の文法的側面からみても, 双称・単数性の代名詞は実際に単数あつかいされているということである⁷⁾。

なお, フィリピンの言語において, Agusan Manobo 語 [WEAVER and WEAVER 1969: 162-169], Casigura Dumagat 語 [HEADLAND and HEALEY 1974: 25], Yakan 語 [HOOKER 1975: 6] などにおいても, 話し手と聞き手一人ずつの双称を単数あつかいしている。そして, これらの例においても, 双称・単数/双称・複数という対立を自称や対称と同じようにみとめている。このことは, 双称・単数というものが存在するという考え方をささえる例であろう。

また, 興味深い例は Australian Pidgin English にもみられる。Sharpe によれば, 自称・対称には単数・2数・複数の区別があるが, 双称には単数・複数の区別しかないとしている [SHARPE 1975: 9]。彼はその根拠として, その人称代名詞の形(表

7) 単数と, 2数のような限定数には単数の接辞(ゼロ接辞)が動詞につくと考えることも可能である。先の数の概念での plural² には -pi がつくという考え方である。ただし, 2数に対応する接辞はなく, 単数と2数を区別しないというのはやはり不自然のように思われる。

表7 Australian Pidgin English の人称代名詞

	単 数	複 数	2 数
双 称	yumi	yumalabad	—
自 称	mi	mclabad	mindubala
対 称	yu	yulabad	yundubala
他 称	im	(im)alabad	(im) dubala

7参照)と、その Pidgin English に対応するアボリジンの言語、Alawa 語と Burera 語の人称代名詞のパタンの類似によるとしている。たしかに、その形をみると、yumi には -dubala がついていないため、2数ではないようにみえる。しかし、Burera 語をみても、Burera 語では自称や対称と同様に双称に単数・2数・複数の区別がある(自称・双称の2数・複数は動詞の接頭辞で区別される) [GLASGOW 1964: 109-117]。そのため、先の Pidgin English と直接の比較は無理がある。一方、Alawa 語の方は、まさしくその Pidgin English と一致する。すなわち、自称や対称には単数・2数・複数の区別があり双称のみ単数と複数の区別しかない [SHARPE 1972: 57]。しかし、このとりあつかいをしているのは同じ著者である Sharpe 自身である。ところが、Alawa 語をより細かくみると、substantival pronominal prefix があり、それは pronominal substitute stem と組み合わされて pronominal substitutive となることが記述されている。そして、その stem の内のひとつ、wini は pronominal prefix の2数と複数のみが組み合わされる。そして、例外として双称の単数が含まれている [SHARPE 1972: 60]。しかし、実はこれは例外ではなく、双称・単数とされているものは、双称・2数であることをしめしているのである。それでは、Sharpe は何故、話し手と聞き手からなる人称を双称・単数と考えたのであろうか。それは、2数形は複数形の /ɛ/ と /l/ に規則的に変化するという形にもとづいている(表8参照)。そして、もし ñalu に対する *ñaŕu という形があるのなら、それが2数形であり、ñanu

表8 Alawa 語の人称代名詞 (direct の場合)

	単 数	複 数	2 数
双 称	ñanu	ñalu	—
自 称	ŋina	ŋalu	ŋaŕu
対 称	ñagana	wulu	wuŕu
他 称	(f) ŋadula	yilula	yiŕula
	(m) ñula		

は単数形であるというわけである。要するに、先の Pidgin English にしても Alawa 語にしてもその形によって単数と考えている。しかし、*ñaŋu という形があるのならば、ñaŋu は単数形ではあるが、それがないときは形として単数形とはきめることはできない。先にみた pronominal prefix の例のように、これは双称・2数とみることの方が自然であろう。

さて、このように単数性や複数性という概念をもちいることによって矛盾なく統一的な数のシステムができあがるが、その結果として、双称の数の多義性という性質が現われてくる。たとえば、話し手と聞き手が1人ずつにいるという状況において、話し手と聞き手が1組のものと意識されたときは単数性をもち、それが実際に2人であることに注目された場合には2数性をもち、さらにそれが1人でないという点に力点がおかれた場合は、複数性をもちつということになる。この双称の数の多義性という性質が後の議論で重要な鍵となってくる。

4.3.2 自称の複数について

Brichoux の Subanon 語と Samoa 語の例の際に問題となった自称の複数について、打ちかけになっていた議論をここでとりあげておこうと思う。すなわち、Brichoux の分析に対して、ひとつは例外的に用いている unnumbered という成分の不必要さを、今ひとつは、左右対称性をもつ分析がみせかけのものであることを述べた。しかし、どのように、Brichoux がとりあげた問題を考えればよいかまでは述べていなかった。このことは、人称代名詞においては、かなりやっかいな問題ではあるが、ひとつの基本的な問題でもあるため、ここでやや詳しく議論しておこうと思う。

この問題のもっとも基礎にあるのは、自称には対称や他称と同様の意味での複数はあり得ないという点である。あるいは、話し手は声を合わせて何かをいう場合を除いて通常は一人であり、話し手自身をもう一人加えるようなことはできないということである。聞き手や会話に参加していない人は、通常の会話でも一人以上であることはそれほど珍しいことではなく、容易に複数を概念化することができる。

この論点を認めるならば、話し手 (S) の複数というものは、聞き手 (H) あるいは会話に参加していない人 (O) を加えることによって成立するというように発展する。今少し、この筋ののっとって論を進めてみると、この場合、3つの可能性がある。すなわち、 $S+H+O$ 、 $S+H$ 、 $S+O$ である。Brichoux はここにおいて $S+H+O$ を考えに入れず $S+H$ 、 $S+O$ のみをとりあげた。また、聞き手の複数においては2つの可能性があり、 $H+H$ 、 $H+O$ と表現できるが、この内の $H+O$ をも切り捨てることによって彼の分析の整合性が保たれている。

表9 自称の複数をつくるときの可能な組合せ (1)

	H	O
a ₁	+	+
b ₁	+	-
c ₁	-	+
話し手のみの場合	-	-

しかし、私はこのような高い抽象度のレベルあるいは、いろいろのものが混り込んだレベルで考えては誤った結論に導かれると思う。そして、切り捨てられた S+H+O, H+O をも含めた論理が必要であると思う。そのためには、それよりは抽象度の低いレベルで一度分析してみることが必要であると思う。

まず、話し手と複数を形成する O は単なる O ではなく、話し手と共有成分を含む O でなければならない。それを Os とすると、同様に Oh (聞き手と共有成分をもつ O) も存在することになる。これらを先の表に適用すると表10ようになる。この場合、Oh は単独で S に加わることはない。必ず H と組み合わせられている。そして、その場合でも Oh は加わっても加わらなくてもどちらでもよい。いいかえれば、話し手の複数において、Oh は H が要素にとりあげられていればとりあげる必要のない要素である。

このことは何を意味するのであろうか。この点をより明確にするために、聞き手の複数についても考えてみよう。ここでは2つの可能性があり、Brichoux 流にかけば H+H と H+O であった。この O は私の方法では Oh であるため、H+Oh と書きかえておこう。この2つの可能性がありながら、この2つを区別している言語は私の知る限りでは一例もない。すなわち、聞き手と、聞き手と共有成分をもつ会話に参加していない人とは区別されていないということである。すなわち、H=Oh とみなされているということである。

ここまでの議論ならば、Brichoux の分析をむしろサポートしていることになる。ところが、そこまででこの議論はとどまらない。実は聞き手にみられた H と Oh を区別しないという過程は、話し手においても同時にみられる。そこでは Brichoux の分析はまったくなくなりたたなくなる。

表10 自称の複数をつくるときの可能な組合せ (2)

	H	Os	Oh
a ₂	+	+	±
b ₂	+	-	±
c ₂	-	+	-
話し手のみの場合	-	-	-

すなわち、話し手と共有成分をもつ Os だけでなく、聞き手にも共有成分をもつ場合がある。Os にならなければ、Hs と表記される存在をここでは考えなければならぬ。表10の H を Hs とすれば、 a_2, b_2, c_2 の区別は全く意味をなさない。聞き手であれ他の人であれ、ともかくも話し手と共有成分をもつ人が1人以上加われば、話し手の複数となる。すなわち、 $S=Hs=Os$ なのである。

実はこの問題を複雑にしているのは、私の立場からすれば、人称と数が明確に区別されないことにある。話し手と、話し手と共有成分をもつかどうかにかかわらず、独立した人としての聞き手と組み合わせられるかどうかはまず問題なのである⁸⁾。聞き手と組み合わせられた場合が私のいう双称であり、組み合わせされない場合が、私のいう自称である。ところが、この双称が、話し手と聞き手が組み合わせられるところから、結果として2数性あるいは複数性を持ち、それを数の問題としてとりあげたことから複雑な様相を呈してきた。しかし、Maranao 語や Hanunóo 語、Lakota 語にみられるような双称の単数性の例を考えると、数と人称の混乱は明らかである。

これを別の形で表現すると、双称をもたない人称代名詞のシステムでは、自称の複数 $\{Hs, Os\}$ から1人以上(2数性をもつ時は2人以上)を、双称をもつシステムでの自称の複数 $\{Os\}$ を1人以上(同じく、2数性をもつときは2人以上)を加えて成立する。そして、双称では、(1)複数性しかもたない場合もあれば、(2)単数性/複数性の場合や2数性/複数性、(3)単数性/2数性/複数性、2数性/3数性/複数性などの場合があり、それぞれによって、複数性の内容は異なる。すなわち、(1)の場合では、話し手と聞き手だけでも複数性を持ち、それに $\{H/Oh/O\}$ のどれかあるいは総てを何人加えてもよい。(2)の場合では、少なくとも $\{H/Oh/Os\}$ から1人以上の人が加えられることによって複数性を持ち、(3)ではそれが2人以上となる。

話し手の複数性は、聞き手やその他の人の複数と比較するとき、確かに話し手その人自身をさらに加えることはできない。しかし、話し手のある要素を共有する人に加えて複数とすることは可能であり、実際にそのようにして複数が存在している。今、それをその要素において同等とみたとき、 $S=Hs=Os$ であり、 $H=Oh$ である。これを先の組合せの表記に還元すると、双称をもたないシステムでの自称では、まさしく、

8) 聞き手は、話し手と会話に参加しているという点では共有成分をもっているともいえる。しかし、この成分を共有している故に聞き手なのであり、聞き手の定義の中に入れる成分であるため、ここでいう共有成分(たとえば同じ日本人であるとか、同じ村の出身であるといった成分)とは本質的に異なったものである。一方で、この会話に参加しているという成分を共有している故に、話し手と聞き手の組合せが人称として可能であり、話し手と会話に参加していない人の組合せ、あるいは聞き手と会話に参加していない人の組合せが人称として独立できないのは同様の理由によっている。

{S}のみとなり、双称をもつシステムでの自称も {S}のみ、そして双称では {H+S}のみとなる。自称および双称の複数は、当然ながら、このような構成になっており、そこにはもはやなんの矛盾もないのである。

この議論は、双称という概念をもちこむことによって、容易に解決できる性質のものであった。そして、Brichouxの誤りは、その認識なしに会話に参加しない人を分析の成分として加えたことにある。さらに、話し手の完全な複数（聞き手や会話に参加しない人の複数に比べて）がないことにあまり力点をかけすぎ、話し手とある共有要素をもつ人を加えて複数ができるという、ごく常識的な点を見逃したことにある。

5. おわりに

本稿では、本論の議論を進めるにあたっての前提を検討してきた。まず、これまでの人称代名詞の emic, etic の研究を概観し、とるべきところはとり、批判すべきところは批判した。そして、本論を進めるための新しい人稱システムと数のシステムの提示をおこなった。そして、それらによって、これまでに記述されてきた人稱代名詞を統一的に考察できる道をつくり上げた。

もとより、本稿によって本論は終るのでなく、むしろはじまるものである。この前提での御批判があれば承りたく思っている。そして、それを以後の議論に役立てたいと考えている。

なお、本論は、当館の象徴・分類・認識の研究班で発表し、また、沖縄での第21回民族学会でも発表したものである。貴重なコメントを下された方々に深謝する。

文 献

- AUSTERLITZ, Robert
1959 Semantic Components of Pronoun: Gilyak. *Word* 15(1): 102-109.
- BAILEY, T. Grahame
1975 (1915) *Linguistic Studies from the Himalayas*. New Delhi, Asian Publication Services.
- BAUMAN, J. John
1975 *Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman*. Unpublished Dissertation Paper, University of California, Berkeley.
- BECKER, A. L. and I. Gusti Ngurah Oka
1974 Person in Kawi: Exploration of an Elementary Semantic Dimension. *Oceanic Linguistics* 13: 229-255.
- BELL, Alan
1978 Language Sample. In Joseph Greenberg (ed.), *Universals of Human Language Vol. 1, Method & Theory*, Stanford, Stanford University Press, pp. 123-156.

- BERLIN, Brent
1963 A Possible Paradigmatic Structure for Tzeltal Pronominals. *Anthropological Linguistics* 5(2): 1-5.
- BERLIN, Brent and Paul KAY
1969 *Basic Color Terms*. Berkeley, University of California Press.
- BOAS, Franz
1911 *Handbook of American Indian Languages, Part I*. Washington, Government Printing Office.
- BRIGHOUX, Robert M.
1977 Semantic Components of Pronoun Systems: Subanon and Samoan. *Studies in Philippine Linguistics* 1(1): 163-165.
- BROWN, Roger W. and A. GILMAN
1960 The Pronouns of Power and Solidarity. In Thomas A. Sebeok (ed.), *Style in Language*. New York, Technology Press, pp. 253-276.
- BUCHLER, Ira R.
1967 The Analysis of Pronominal Systems: Nahuatl and Spanish. *Anthropological Linguistics* 9(5): 37-43.
- BUCHLER, Ira R. and R. FREEZE
1966 The Distinctive Features of Pronominal Systems. *Anthropological Linguistics* 8(8): 78-105.
- BUECHEL, Eugene
1939 *A Grammar of Lakota: The Language of the Teton Sioux Indians*. St. Louis, John S. Swift Co.
- CAPELL, C. and H. E. HINCH
1970 *Muang Grammar: Texts and Vocabulary*. *Janua Linguarum Practica* vol. 98, The Hague, Mouton.
- CONKLIN, Harold C.
1962 Lexicographical Treatment of Folk Taxonomies. *International Journal of American Linguistics* 28(2) Part IV, pp. 119-141.
- FORCHHEIMER, Paul
1951 *Category of Person in Language*. Unpublished Dissertation Paper, Columbia University, Cambridge.
- GLASGOW, Kathleen
1964 Four Principal Contrasts in Burera Personal Pronouns. In Pittman & Kerr (eds.), *Papers on the Languages of the Australian Aborigines*. Occasional Papers in Aboriginal Studies (3), Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra, pp. 109-117.
- GRIERSON, G. A. (ed.)
1967 (1903) *Linguistic Survey of India, Vol. III, Tibeto-Burman Family*. Delhi, Motilal Banarsidass.
1973 (1906) *Linguistic Survey of India, Vol. IV, Munda & Dravidian Languages*. Delhi, Motilal Banarsidass.
- HAAKSMA, Remy
1933 *Inleiding tot de Studie der Vervoegde Vormen in de Indonesische Talen*. Leiden, E. J. Brill.
- HEAD, Brain
1978 Respect Degrees in Pronominal Reference. In Joseph Greenberg (ed.), *Universals of Human Language Vol. 3, Word Structure*, Stanford, Stanford University Press, pp. 151-211.
- HEADLAND, Thomas N. and Alan HEALEY
1974 Grammatical Sketch of Casiguran Dumagat. *Papers in Philippine Linguistics* 6: 1-54. Pacific Linguistics Series A-43.

- HOOKER, Betty
 1975 Some Nominal Phrases in Yakan. *Papers in Philippine Linguistics* 7: 1-12. Pacific Linguistics Series A-44.
- INGRAM, David
 1978 Typology and Universals of Person Pronouns. In Joseph Greenberg (ed.), *Universals of Human Language Vol. 3, Word Structure*, Stanford, Stanford University Press, pp. 213-247.
- 泉井久之助
 1978 『印欧語における数の現象』大修館書店。
- KAY, Paul and Chad K. McDANIEL
 1978 The Linguistic Significance of the Meanings of Basic Color Terms. *Language* 53(3): 610-646.
- KRUPA V. and G. ALTMANN
 1961 Semantic Analysis of the System of Personal Pronouns in Indonesian Language. *Archiv Orientální* 29: 620-625.
- LYONS, John
 1977 *Semantics 2*. London, Cambridge University Press.
- McKAUGHAN, Howard
 1959 Semantic Components of Pronoun System: Maranao. *Word* 15(1): 101-102.
- 三上直光
 1981 「現代タイ語の呼称詞」『慶応義塾大学言語文化研究紀要』(13). pp. 119-136.
- SHARPE, Margaret C.
 1972 *Alawa Phonology and Grammar*. Australian Aboriginal Studies No. 37. Aboriginal Institute of Aboriginal Studies, Canberra.
 1975 Notes on the "Pidgin English" Creole of Roper River. *Papers in Australian Linguistics* 8: 1-20. Pacific Linguistics Series A-39.
- 下宮忠雄
 1979 『バスク語入門』大修館書店。
- 谷 泰
 1979 「呼称選択行動の方法論的考察」, 谷 泰編『人類学方法論の研究』京都大学人文科学研究所, pp. 135-180.
- THOMAS, David
 1955 Three Analysis of the Ilocano Pronoun System. *Word* 11(2): 204-208.
- TYLER, Stephen A.
 1969 *Koya: An Outline Grammar, Commu Dialect*. Berkeley, University of California Press.
- WEAVER, Dan and Marilou WEAVER
 1969 Ranking of Personal Pronouns in Agusan Manobo. *Oceanic Linguistics* 3: 161-170.
- 吉田集而
 1980 「指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5(4): 833-950。
 1981 「空間認識の類型化について」『季刊人類学』12(3): 80-125。